日枝神社

館山市那古六七一番地(那古寺観音堂境内)

祭神

大山咋命(おおやまくいのみこと)

●宮　司　加茂信昭
●例祭日　四月十四日

那古寺境内にある日枝神社

由緒

那古観音堂の奥に日枝神社があります。神仏分離令(慶応四年)までは山王大権現といい、那古寺の裏鬼門を守護する境内鎮守堂でしたが、その後、社号を日枝神社と改称しました。現在は明治維新まで那古寺の寺領であった寺赤・宿・芝崎の三区が其々の氏神として管理しています。

境内には江戸時代に寄進された四角型灯籠一対とさらに昭和四十年十二月吉日の日付けが入った一対の狛犬があります。向かって右の狛犬、阿形像の台石表面には「奉納」、裏面には「那古芝崎　日の出屋」と刻まれています。

現在、一月の第二日曜日には芝崎集会所の三本の掛け軸の前で「おびしゃ」が行われます。

同じく、四月第二日曜日の日枝神社例祭日には「甘酒まつり」も行われて、子供神輿が町内を一巡します。

「おびしゃ」に使われる三本の掛軸

安永四年六月の文字と寄進された方々十八名の名前が刻まれている灯籠

自慢の祭

「那古観音祭礼」は那古寺の門前町を中心とした六町内の五台の山車と二台の屋台の引き廻わしにより行われます。寺院が取り仕切る祭礼は千葉県では成田山新勝寺と補陀洛山那古寺との二か所と伺います。全国的にも珍しいケースではないでしょうか。

芝崎組は青年団より総代(祭礼の最高責任者)を一名選出し、十数名からなる団員の献身的な働きにより、準備から運営まで青年団が中心となって祭礼を執り行っています。

また、交通、防犯、会計等の役割は壮年会も協力し、子供会のお母さん達は祭礼当日門口に飾る花を子供達と一緒に作ったり、祭礼終了後の後片付けにも積極的に参加します。町内会では山車の通り道の小枝払いを行う等町内が一体となって祭礼を盛り上げています。

那古祭礼での曳き廻し

祭礼初日の宵祭では町内を隈なく山車の引き回しを行い、地域中に子どもたちの元気な声とお囃子の音色が賑やかに響き渡ります。町内には狭い道も多く、その為那古地区の中ではもともと小振りに作られている山車ですが更に太鼓や提灯までも一度はずして入って行く場所もあります。町内の隅々まで山車の姿やお囃子の音を届けたいという優しさと地域の絆を大切にする深い思いが伝わってきます。

大人たちに見守られている芝崎の子どもたち

毎年祭礼前に行われる太鼓の練習会には、小さな子から小中学生まで多くの子ども達が集まり、子どもを会場まで送ってきた若いお母さんも興に乗って参加して一頻り太鼓を敲いたりと、和気藹々とした雰囲気の中で青年団の熱心な指導が連日行われています。また一方「太鼓はゆっくり叩くのが基本」など、子ども達にしっかり芝崎伝統の桴(ばち)さばきを伝えたいと青年団自体の太鼓の練習会も毎月一回続けています。

他にも木遣りの歌詞の保存をしたり、手持ちの扇子を作ったり、格調高い伝統のお祭りを心掛けています。更に、祭礼当日頂いたお祝いのお礼に青年が手造りの木札を配ったり、「からし色の襦袢」を揃えるなど感謝の念と連帯感を大切にする芝崎組です。

町内会は平成二十六年に町内の皆様の絶大なるご支援ご協力を得て、芝崎山車修繕実行委員会を発足させました。山車が出来て以来凡そ百年振りの大修繕と聞いております。今年漸く五カ年計画終了の節目を迎えました。青年達が見守る中、今この山車に乗って大幕の周りでのんびりとお祭りを満喫している幼い子供達、綱を引く子、太鼓を敲く子、この子達の子、孫、ひ孫、玄孫の時代になってもこの子達の楽しかった故郷の祭りの思い出が代々語り継がれていくような、そんな穏やかな平和な時代がいつまでも続きますようにと今の芝崎の大人たちの祈りを込めて令和元(二〇一九)年七月の御披露目を迎えます。

思いやりと地域の絆、伝統と芝崎らしさを尊重した活気と笑顔に溢れる自慢のお祭りです。

このパンフレットは、地域の方々からの聞き取りを中心に、さまざまな文献・史料からの情報を加えて編集しています。内容等につきましてご指摘やご意見等ございましたら、ぜひご連絡いただき、ご教示賜りたくお願いいたします。